

SNS 型ストーリー中心型カリキュラムの実践検証 - インジェクショントレーナー養成コース -

Practice inspection of the story-centered curriculum with SNS -Injection trainer training course-

北村 隆始^{*1,2} 田中 光子^{*1} 星野 早苗^{*1} 根本 淳子^{*2} 渡邊 あや^{*2} 喜多 敏博^{*2} 鈴木 克明^{*2}

Takashi KITAMURA^{*1,2} Mitsuko TANAKA^{*1} Sanae HOSHINO^{*1}

Junko NEMOTO^{*2} Aya WATANABE^{*2} Toshihiro KITA^{*2} Katsuaki SUZUKI^{*2}

^{*1}テルモ株式会社 ^{*2}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1} Terumo Corporation ^{*2} Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: rkitamura@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あらまし：実務家育成研修において、実践的な教育を目指すためには、実務が容易に想像できる理論に基づいた教育カリキュラムが求められる。本報では静脈注射の看護指導者向けインジェクショントレーナー養成コース（以下トレーナー養成コース）をもとに受講者における実践的な省察を目標とし、ゴールベースシナリオ理論に基づくストーリー中心型カリキュラム（以下 SCC）⁽¹⁾を実施した。実施後アンケート及び受講者報告書を分析した結果、アンケートからは、満足度や必要性で高い結果を得る事ができた。また報告書からは、習得した内容をもとに自院で研修実施の意欲の記述を確認できた。最後に報告書を SNS 上で公開したことにより、SCC に直接参加できなかった受講者にも気づきを与えている事が示唆された。今後は積極的な SNS 上でのグループ学習や SCC 必須化への策を練り改善を図りたい。
キーワード：SNS, GBS 理論, ストーリー中心型カリキュラム, 協調学習, 看護教育

1. はじめに

トレーナー養成コースは 2008 年度よりトライアルコース、第 1 回目（SCC 実施前）を経て、SCC の設計を行い（昨年度全国大会⁽²⁾で発表）、2009 年度第 1 回で SCC を実施した。実施際して、社内看護師による形成的評価（小集団評価）⁽⁴⁾でコース確認を行った。本コースは、全国から延べ 7 日間（期間 4 ヶ月）のコースを開始した。今回は 2009 年度本コース実施により、受講者アンケートから SCC の満足度と必要性が高い結果となった点と、従来型 SCC⁽³⁾におけるフィードバックを SNS の活用で、相互に閲覧可能な協調学習により未報告者も気づきを得て、満足度と必要性が高い結果となった点を報告する。

2. 方法

事前に SCC 実施の協力案内を受講者 17 名（経験 Ave.16.9 年 Max. 27 年 Min.2 年 SD7.0）に行いアンケートの依頼を行った。コース自体は、2008 年度コースの各セッションに、静脈穿刺の基礎（実技）を追加したのみで、内容面の変更はない（一部講師の入れ替わりあり）。SCC の実施環境は、当社 SNS（クリニカルジョイントTM）⁽⁵⁾にトレーナー養成コースの SNS を開設し実施した。受講者には SCC の簡易な説明資料を配布した上で、初回当日、カバーストーリー及び初回ストーリーについて、紙資料を用いて説明を行なった。SNS 参加登録には、メールアドレスが必要であるため、集まった 9 名（53%）に招待メールを送信した。また、メールがない受講者には、集合研修時に課題を配布し、報告書を Fax にて送付するよう依頼した。

2.1 研修の構成

トレーナー養成コースの 4 ヶ月延べ 7 日間の集合研修の流れは次の通りである。コース開催前の事前情報として 6/20 以前に営業担当者（MR）が受講者の施設を訪問し SCC 実施経緯と概略の説明を行った。インターネットの環境が整わない受講者を配慮し、各回の集合後に SCC の画面を印刷し提供した。第 1 回目の集合研修において配布した画面コピーは、6/18 に段階で SNS へ公開した。また、報告書を提出の掲示板についても公開されていた。

次に、第 2 回目の集合研修に向けた事前情報として、使命の掲示板を 7/3 に、情報源の掲示板を 7/14 に、公開した。その際には、あまり早く公開しないように学習者制御を実施した。尚、第 2 回目の集合研修の事後報告である報告書提出掲示板を公開したのは、8/15 であった。

さらに、3 回目に向け、使命・情報源の掲示板を 8/15 に、第 3 回集合研修の報告として、報告書提出掲示板を 8/24 にそれぞれ公開した。第 4 回目は、使命・情報源の掲示板を 9/8 に、公開した。第 4 回目の集合研修については、学習者制御のつもりで、事後報告の日程を遅らせたが、集合研修翌々日には、受講生から、報告書の提出が行われた。

2.2 報告書の取得方法

報告書の取得方法は、初期検証の結果⁽⁶⁾Web 環境の問題で参加できない方が多かった（17 名中 7 名のみ Web 参加）。この時点で取得方法の変更は難しいため、Fax による参加を強く要望した。しかし SCC の学習効果の説明が充分伝わらなかった点で、参加者数は増加しなかった。自由記載では、2 名の方が

全員参加でなかった点が惜しいと記述があった点からも、全員参加を必須として運用する必要があった。

3. 結果

3.1 SCC に対する実施後アンケート

SCC 単独でのアンケート結果は、以下の通りである (図 1)。

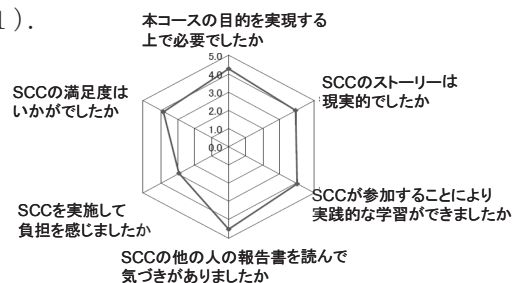


図 1 SCC についてのアンケート

研修受講者 17 名に対し、有効回答数が 16 であった。アンケートの質問は、全 6 問で、5 件法により評価を行なった。結果、SCC の必要性は Ave.4.3、ストーリーの現実性は Ave.3.9、参加して実践的な学習になったかは Ave.4.0、負担を感じたかが Ave.2.9、満足度は Ave.3.8 となり、全体的に肯定的な結果が得られた点は、SCC の有効性が認められたといつてよいであろう。尚、他の人の報告書を読んで気づきがあったかは Ave.4.5 (報告者 Ave.4.3 未報告者 Ave.4.7) で、SNS 掲示板のフィードバック共有の効果が示唆された。負担感については、報告書の参加率が高くないため実感していないからと思われる (傾向として報告者ほど負担を感じていた)。

3.2 内容面の結果

提出された報告書を元に事例コードマトリックス法⁽⁸⁾にて内容面を概観した。報告書は、4 回×17 名として延べ 68 回の機会があったが、結果として延べ 20 の報告書 (提出率 35%) が提出された (表 1)。

表 1 報告書提出状況

報告者	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	投稿数
A			○		1
B	○				1
C	○	○	○	○	4
D	○				1
E	○		○	○	3
F	○	○			2
K	○	○	○		3
N	○	○	○		3
O			○	○	2
合計	7	4	6	3	20

縦列コード (実施回) は、どの回も複数名 (Max.7Min.3) の書き込みがあり、内容面の広がりを見ることができた。一方横列の事例 (報告者) は、実施内容の報告が中心となっていた。しかし、回を重ねるごとに、「講師からの情報を元に自院との比較」や、「対応する行動の記述」が加わり、全体では

「自院での展開」や「理想とする研修」などの内容に言及している記述が 36 箇所あり自院で行動に活かそうとする意欲が確認できた。コース全体の流れ繋がりに関しては、研修を実施した際の内容を「振り返り」次に繋げる記述が 4 箇所確認できた。

4. 考察

低提出率の原因として考えられる点としては、Web 環境により SNS に参加できなかったこと、提出を必須課題としなかったことなどが考えられる。報告書提出に対する指導効果は、当初目論んでいたピアフィードバックは一件も無く、全てスタッフとの 1 対 1 形態となってしまった。また報告項目に実施内容を求めたため、負担を高める要素となっているようであった。

しかし、自院の課題を挙げ、セッションの手法を取り入れる意思表示の記述は、提出されたほとんど全ての報告書に確認できたことから、受講者意識の高まりを窺うことができた。今後は、実際に自院で実施ができていたかなど行動の面を追っていきたい。

最後に、報告書を SNS 上で公開したことにより、受講者全般に気づきが高い結果となっており、未報告で SCC 参加ができなかった受講者にも気づきを与える事ができていたようだ。

以上の結果を踏まえ今後は、2010 年度実施に向け積極的な SNS 上でのグループ学習や参加者必須化への策を練り改善を図って行きたい。

参考文献

- (1) Schank, R.C., Berman, T.R., & Macpherson, K.A.: "Learning by Doing." In REIGELUTH, C.M.(Ed.), Instructional-Design Theories and Models: A New Paradigm of Instructional Theory Vol.II:pp.161-182.(1999)
- (2) “熊本大学大学院教授システム学専攻(2007)IT 時代の教育イノベーション育成” 文部科学省平成 19 年度大学院教育改革支援プログラム年次報告書,熊本,pp.23-73
- (3) 北村隆始・田中光子・星野早苗・根本淳子・渡邊あや・鈴木克明:” SNS を活用したストーリー中心型カリキュラムの提供” ,教育システム情報学会,第 34 回全国大会発表論文集,pp.376-377. (2009)
- (4) 鈴木克明:” 教材設計マニュアル独学を支援するために” ,北大路書房,京都,pp.95-128. (2002)
- (5) 鈴木雅隆,永松康能,小川芳幸:” IT 技術を活用したコミュニケーション手法の地域医療連携への応用可能性ー地域医療のためのコミュニケーションプラットフォーム「クリニカルジョイント TM」の創出” , IT ヘルスクエア学会抄録集 4(1),pp.38-41(2009)
- (6) 北村隆始,田中光子,星野早苗,根本淳子,渡邊あや,鈴木克明:” ストーリー中心型カリキュラム採用の看護師指導者向けインジェクショントレーナー養成コースの初期検証” ,日本教育工学会第 25 回全国大会発表論文集,P2a-FLS-21(2009)
- (7) 根本淳子,鈴木克明:” ゴールベースシナリオ(GBS)理論の適応度チェックリストの開発” ,日本教育工学会論文誌,29(3),pp.309-318. (2005)
- (8) 佐藤郁哉:” 質的データ分析” ,新曜社,東京,(2008)